



# 中国雲南省・シップソンパンナー・タイ族自治州を訪ねて

北原, 淳

---

**(Citation)**

社会学雑誌, 8:110-114

**(Issue Date)**

1991-03-30

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81010796>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010796>



## 中国雲南省・シップソンパンナー・タイ族自治州を訪ねて

北原 淳

一九九〇年五月一日より一三日まで、中国雲南省の省

都昆明市にて「第四回国際タイ学会大会」（中国式表示で

は「第四回タイ学研究国際会議」が開催された。国際タ

イ学会は過去、タイ国、オーストラリア等で開催され、今

回の中国で四回目を数えた。今回は天安門事件から一年た

らずという時期であっただけに、これに抗議して外国人研

究者の出席が少ないのではないかと心配された。しかし、

結果的には、出席者三五〇名（うち外国人約二〇〇名）発

表者一二〇名の規模となり、盛会であった。中国側は開会

式にタイ国・国王陛下の実姉カンラヤニー・ワッタナー妃

を招くという心遣いを見せた。昆明という地方の学会とは

いえ、事件以降の中国としては大きな規模の国際会議であっ

たらしく、『人民日報』（国際版）にも報道された。

組織事務局長は本誌六号（一九八九年）に「タイ族の起

源について」を寄稿戴いた東南亜研究所長の陳呂範教授で

ある。私が指導教官の留学生で、文学研究科（修士課程）

在籍の趙さんの前の職場の上司でもある。私は、事件への

評価はそれとして、このようなご縁もあって、昆明市の国

際タイ学会に出席し、初日午後の第二分科会で「今世紀初

頭の中部タイにおける開拓社会の復活」という報告を行っ

た。同じ分科会に、私が駆け出しのころ熟読した本の著者

コンスタンス・ウィルソン先生（ノーザン・イリノイ大学）

が見えて報告をされ、感激した。そこには尊敬する進歩的

人類学者アンドルー・タートン教授（ロンドン大学）も見

えていて、知り合いになれた。第一級のタイ研究者たちに会えただけでも、来たかいがあったと思った。

なぜ、「タイ」に関する国際会議が成立し、しかも、なぜ雲南省で開かれるのか。今の「タイ国」だけを念頭におくと、疑問をもたれる方もあろう。もちろん、「タイ国」の研究者が西欧を含め世界中にいるから、国際会議が成り立つ、という理由はある。しかし、もっと大事な理由は、「タイ」系の諸民族の分布が今のタイ国の領域だけに限らないことにある。「タイ」系諸民族は、西はインドのアッサム地方、ビルマ（ミャンマー）のシャン州、東はラオス一帯、ベトナムの西北山地、北は中国雲南省といった広がりをもって、インドシナ半島を中心にインドの東部から中国南部という広い範囲に分布する。だからたとえば今回は、インドのアッサム地方からきた専門家、タイ国からきた専門家たちが、地元中国の雲南省の地方史、民族学等の専門家たちと交流し、それぞれの地域のタイ族の歴史や伝統を発表し、議論しあい、比較をするという事態となった。つまり、国際「タイ」学会は、単に現在の「タイ国」に限らず、この国境を越えた広範囲の「タイ」系の諸民族を研究するからこそ国際的になりうるのである。

## シップソン・パンナーと文化大革命

ところで、今回の私のタイ研究者としての興味は実は学会以上に、学会の後、エクスカーションとして訪れる予定のタイ族の農村のほうにあった。それは昆明から南西へ三五〇キロの地点にあるシップソン・パンナー（タイ語で二の国の意味。中国名は西双版纳シーサン・パンナー）タイ族自治州であった。州都のチェン・フン（またはチェン・ルン。タイ語で黎明の都の意味。中国名は景洪）は中国の国境近くに位置し、南はビルマまで五〇キロ、そのズーッと南はタイ国のチェンマイまで二五〇キロの距離である。つまり、ここは中国的世界の辺境にあって、むしろ東南アジア的世界なのである。人口六一万人中タイ族が二二万人ほどいる。タイ族は焼畑農耕民族ではなく、水田耕作民族であるから平地に居住することが多い。従って当地の平地農村のほとんどはタイ族の村である。シップソン・パンナーは七〇年代から観光地として外国人に開放されたが、現在は昆明から一時間半ほどで直通のジェット機が飛ぶ。

学会の後、五月一五日から一八日まで景洪（チェン・フ

ン)に滞在し、タイ人を中心とする六〇人ほどの外国人団体に加わって、周辺のタイ族の集落と寺院を見学した。滞在二日目の一六日にドーン・テンという集落を訪れたとき、タイ国のチェンマイ大学の人類学の先生の北タイ方言に助けられながら、私の標準タイ語も加えて四二才という男性に風習のことを聞いてみた。タイ国内のような訳には行かないが、何とか意思疎通ができるのに感激した。土地の均分相続、婿入り婚(婚後妻方居住)、ピー・プーヤー祖霊信仰、など北タイの風習そのものであった。ただし土地の相続は所有権ではなく利用権のものであった。

シップソン・パンナーにも文化大革命の風は及んでいた。今やほとんどのタイ式寺院には素人の手になる稚拙な仏画、彫刻、仏像しかない。同じ日にやや離れたマンガアン寺の境内でたたずんでいたら、タイ族のおばあさんが来て標準タイ語で話してくれた。文革で寺院が本堂も含めてすっかり破壊し尽くされ、一九八二年によく復興したという。この寺はやや小高い岡の上にあるので下から一〇〇段以上の石段が続いており、その両側にはナーガ(龍蛇神)の飾りの手すりがある。チェンマイの有名な山上寺院ドーイ・ステーブのミニチュア版と思えばよい。しかし復興なった

その手すりのナーガの稚拙さは悲しいばかりであった。文革は伝統的仏教美術を守る職人を追放してしまった。

中国映画「青春祭」を思い出した。文革によって北京から辺境の地シップソン・パンナーに下放させられた女子大生が主人公の叙情的な文革批判の映画である。あの映画では牧歌的なタイ族稲作社会の習俗、文化が描かれていたが、その文化の根幹をなす仏教の破壊がかくもすさまじかったことを知った。

### 照葉樹林文化に触れて

連日の雨で河は水嵩を増していた。三日目の一七日は景洪より赤く濁ったメコン河の上流(瀾滄江)を一時間半ほど下り、ムアン・ソンマン寺院のそばのとある民家を見せてもらった。電気は一〇年前からきている、といい、耕耘機、テレビ、ラジカセ、ラジオ、ミシン、近代の台所があった。これらの生活様式はタイ国でもすっかり定着しているが、それに決してひけをとらない。同行した調査経験のあるタイ人の先生たちは、口々に東北タイや北タイの村よりもシップソン・パンナーの村の方が豊かだといっていたが、

▼ムアン・ソンマン寺院



これは私の実感でもあった。景洪のいささかひどい田舎町的な都市機能とは対照的であった。資本主義のタイ国は逆である。単純化すると町は快適で村は貧困である。

当地のタイ族と同時に興味深かったのは同行のタイ国からきた研究者、官吏の「民族のふるさと」への愛着であった。私も人並みには当地を訪れることを長年祈願していたが、タイ国からきた人々の当地への思い入れはその何倍か強かった。たとえばこんな話があった。文革は僧侶を追放し、僧侶の養成が途絶えてしまったため、今の僧侶はみな若い。その何人かは北タイへ留学して上座部仏教を修行してきたという。今回タイ国からの一行数名は村へ行き僧侶のタイ国への留学資金を喜捨（タンブン）したそうである。それは彼らの「民族のふるさと」への強

い愛着の現れであろう。

日本人でもこのシップソン・パンナーを「日本文化のふるさと」と感ずる人は多い。先頃亡くなられた名誉教授の三田博雄先生（文学部・科学史）も、その個人通信、「ふくろう通信」で、シップソン・パンナーを数回にわたって紹介し、その文化と社会を絶賛しておられた。数年前お会いしたとき、小生がタイ研究をしていることを知って、シップソン・パンナーを訪れた時の感激を熱を込めて話して下さった。ことの起りはおそらく、京都人文研の人々がインドシナ・雲南を中心に分布する「照葉樹林文化」の存在を主張し、それを、神社の境内の樹木に象徴されるように、日本文化のルーツだと主張したことにあろう。そしてシップソン・パンナーはまさにその「照葉樹林文化」の真つ只中なのである。たまたま昆明で、鳥越憲三郎著（段曉明訳）『倭族之源―雲南』（雲南人民出版社、一九八五年）という中国語の本を買った。表紙をあげてみると、『雲南からの道―日本人のルーツを探る』（講談社、一九八三年）の翻訳とある。

チェン・フン（景洪）周辺の山はたしかに照葉樹林である。奥地の少数民族の村を二カ所訪問したときは、うっそ

うと繁る照葉樹林の原生林もまだ一部で健在であった。日程初日の一五日午前中に訪問した一カ所は高山で深い霧に包まれむしろ寒いくらいであった。午後訪問したもう一カ所では、強い熱帯の日照りの中で、かけねなしに耳を聳するばかりに、かまびすしく蝉が鳴いていた。タイ国でもよく聴くが、熱帯の蝉の声は岩に染み入るところか、岩をも揺るがすような騒々しさであり、我々の感覚にはやややまじまない。

しかし、現在はその照葉樹林の多くにゴムの木が植えられ、ゴム樹林に変わってしまった。着陸時にジェット機上でみてそうではないかと直感したが、チェン・フン空港周辺の山がほとんど一面のゴム林であったことを滞在の後であらためて確認した。メコン河を下ったとき、焼畑やゴム樹林にするため、表面の緑がはぎ取られ、熱帯特有の赤いらテライトがそのまま露出し、土壌流出を起こしている山々をみた。メコン河の濁りが激しいのはそのせいではないか、とも思った。こうして牧歌的なシップソン・パンナーの照葉樹林にも開発の波が押しよせていることを知った。

ある日の午後が自由時間となった。私は一人でホテルの

▼チェン・フン郊外の脱穀作業風景



有料自転車を借りて、チェン・フンの郊外の柵で囲まれた一角の農道に勝手にはいり込み、水田で脱穀作業をしている若夫婦らしき二人に標準タイ語の会話を試みた。ここはもと人民公社の経営する広い土地だったが、生産責任制への転化で個人請け負いの耕作となったように見うけられた(田の柵の状態からそう判断した)。残念ながら私の標準タイ語は中国語教育世代のその若夫婦にはほとんど通じなかった。しばらく写真をとったり、脱穀技術を観察したりして別れるとき、男に「パイ」(行くよ)といったら、「パイ」(行くか)とにっこり笑った。私はシップソン・パンナーにいてることを深く実感し、満足した。

(神戸大学文学部教授)